財団の沿革

明治25年4月(1892年) 大日本蚕糸会創設(任意団体)

目的 蚕糸業の改良発達

事業 調査、海外販路拡張、業界連絡、品評会、表彰、建議、図書刊行、講習会など

組織 会員制、各県に支会設置

明治38年8月(1905年) 社団法人認可

初代総裁に、伏見宮貞愛親王殿下を奉戴

大正 2年 8月(1913年) 総裁に、閑院宮載仁親王殿下を奉戴

昭和15年3月(1940年) 財団法人蚕糸科学研究所設立許可

当時ナイロンの発明と戦争による生糸需要の変化に対応するため、

生糸及び絹に関する研究の推進が強く要請され、

民間寄付金171万円(内基本金50万円)をもって、総合研究機関として設立

昭和17年5月(1942年) 社団法人大日本蚕糸会は財団法人蚕糸科学研究所と合併のため解散し、

新しい財団法人大日本蚕糸会に事業等を継承

昭和20年9月(1945年) 総裁に梨本宮守正親王殿下を奉戴

昭和22年9月(1947年) 総裁に節子皇太后陛下(貞明皇后)を奉戴

昭和27年7月(1952年) 文部、農林両省の共管に移行

総裁に高松宮宣仁親王殿下を奉戴

昭和28年4月(1953年) 貞明皇后蚕糸記念事業を開始

蚕糸科学研究所小平養蚕所を同小平支所に改称

昭和49年4月(1974年) 蚕糸科学研究所小平支所を茨城県稲敷郡阿見町に移転し、名称を蚕品種研究所に改称

昭和56年4月(1981年) 総裁に常陸宮正仁親王殿下を奉戴

昭和58年4月(1983年) 旧蚕糸会館を取り壊し、新蚕糸会館を建設

昭和62年7月(1987年) 蚕糸科学研究所建物(新宿区百人町)を取り壊し、サンケンビルヂングを建設

平成 4年 4月(1992年) 創立100周年記念行事を開催

平成11年12月(1999年) 蚕品種研究所を蚕業技術研究所に改称し、研究領域を拡大

平成17年6月(2005年) 天皇皇后両陛下、蚕糸科学研究所へ行幸啓

平成21年11月(2009年) 天皇陛下御在位20年慶祝 蚕糸絹文化シンポジウムを開催

平成24年4月(2012年) 創立120周年記念行事を開催

平成24年12月(2012年) 社団法人日本絹業協会解散に伴う事業継承

平成26年4月(2014年) 公益法人制度改革により「財団法人大日本蚕糸会」から「一般財団法人大日本蚕糸会」へ

移行登記(行政庁は内閣府)

令和 3年 4月(2021年) 蚕糸科学技術研究所発足(蚕糸科学研究所•蚕業技術研究所統合)

所在地

〒100-0006 東京都千代田区有楽町一丁目9番4号 蚕糸会館 6階/役員室·総務部 TEL.03-3214-3411 FAX.03-3214-3415 企画調整部 · 蚕糸絹業振興部 TEL.03-3214-3500 FAX.03-3214-3415 敷地 1,091㎡

■JR有楽町駅 日比谷口 徒歩2分 ■東京外口日比谷線・千代田線・都営三田線 日比谷駅 B1出口 徒歩2分 東京外口有楽町線 有楽町駅 B1出口 徒歩2分 東京사口丸の内線·銀座線 銀座駅 A3出口 徒歩5分



蚕糸科学技術研究所

〒300-0324 茨城県稲敷郡阿見町飯倉1053 TEL.029-889-1771

規模 地上10階、地下2階 延9,946㎡

FAX.029-889-2356 動物 118 355㎡ 規模 本館、研究棟等23棟 延5,500㎡

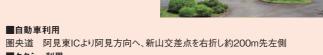
JR常磐線荒川沖駅 所要時間20分

■自動車利用

■タクシー利用









サンケンビルヂング

〒169-0073 東京都新宿区百人町三丁目25番1号 サンケンビルヂング

TEL.03-3368-4891 FAX.03-3362-6210 敷地 6 200㎡ 規模 地上5階、地下1階 延15,925㎡





■JR山手線 新大久保駅 徒歩8分、高田馬場駅 徒歩10分 JR中央·総武線 大久保駅 北口出口 徒歩6分 ■東京外口東西線 高田馬場駅 徒歩10分



https://silk.or.jp

R6.4.1500



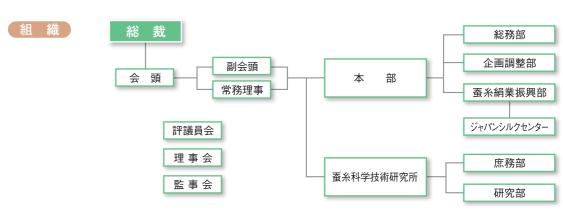
財団の概要

名 称 一般財団法人大日本蚕糸会 The Dainippon Silk Foundation https://silk.or.jp

設 立 昭和15年(1940年)3月16日認可

この紋章は、桑の葉と 繭をイメージしています

あわせて関係する科学技術を助長振興し、かつ、蚕糸絹業の改良発達を図り もって蚕糸絹に係る社会文化の向上発展に寄与することを目的とする。



本部の事業

1 蚕糸絹業功労者の表彰

蚕糸絹業の振興発展等に貢献している方に対して毎年度表彰を

2 蚕糸絹の科学技術を対象とした研究助成 蚕糸絹に関する研究を公募し、毎年度助成を行っています。

3 蚕糸・絹業提携への支援

川上から川下までの関係者が一体となって純国産絹製品づくりに 取り組む提携グループ等へ支援を行っています。

4 蚕糸絹に関する情報発信・交流 蚕糸絹に関する情報の発信や、蚕糸絹を利用する関係者が集まった

交流会を開催しています。

5 ジャパンシルクセンター等での蚕糸絹の展示・普及 蚕糸絹の普及のためにジャパンシルクセンターを設置し絹製品の 販売や展示会を開催しています。

6 純国産絹マークの運営 国産繭から繰糸した生糸を国内で製織・加工した純国産絹製品に 対して、マークの発行・管理を行っています。

7 蚕糸関係出版物の刊行 蚕糸絹に関する情報誌や本会の研究報告を発行しています。

8 海外蚕糸技術者等に対する研修・交流

海外からの蚕糸絹に関する技術者を研修生として受け入れて研修 を行っています。



純国産絹マーク

純国産



蚕糸功労者表彰式(総裁殿下御臨席)

純国産絹製品の需要増進

9 財団の管理運営

蚕糸科学技術研究所

Institute of sericulture and silk science

飼育から製品まで 各セクションの プロフェッショナルが集結

蚕糸科学技術研究所は、蚕糸研究に携わる民間 機関のひとつとして、基礎研究や先端技術開発に取 り組む大学・国公立機関との連携も必要に応じて推 進しながら、蚕糸分野の研究・技術開発を進めてい ます。同時にこれまで培われた技術の伝承・普及に も取り組んでいます。当所は、2021年の蚕業技術研 究所と蚕糸科学研究所との合併により、蚕種から絹 織物に至るまでの研究成果や技術動向を一研究機 関から情報発信できる全国でも稀な総合的な研究 所となり、一連の生産技術を支える遺伝資源、蚕育 種、養蚕、栽桑、製糸および絹素材に関する基盤研

究に取り組んでいます。

○ 飼育環境

当所では、稚蚕飼育や実用規模での試験飼育が可能 な蚕室設備を備え、一蚕期(約1ヶ月)で最大20万頭のカ イコ飼育に対応できます。この大量飼育は、約3ヘクター ルの広大な桑園から供給される年間約40トンの新鮮な 桑葉によって支えられています。桑園には144種類の桑 品種見本園が設置されています。





○ 繭質調査・生糸検査

良質な繭をつくる品種の選抜やその系統の維持には 繭の品質評価が不可欠です。当所で保存する各品種の 繭質が適正に継代維持されているか調査するために、 検定用の繰糸機を用いて繭質評価を行っています。ま た、生糸の性状調査に必要な技術と専用設備も整備さ れ、生糸検査*にも対応しています。

当所ではかつて我が国における生糸の大量生産を支 えた日産自動車製のHR型自動繰糸機を保有し、中規模 量(約20kg)の生糸受託生産も行っています。

※生糸検査は、「一般財団法人大日本蚕糸会生糸依頼検査要領」に





● 蚕種製造

当所で開発したオリジナル蚕品種やカネボウ系蚕品種 の卵(蚕種)を、養蚕農家や企業向けに年間約400万粒 (160箱*)製造しています。特に、国内で最も飼育量の多 いカネボウ系蚕品種の製造に必要な原種の蚕種を蚕種 製造会社に供給しており、養蚕業の維持にとって重要な 役割の一端を担っています。これらの蚕種製造では徹底 した母蛾検査を行っています。

※養蚕では一箱25000粒として農家に蚕種が配布されます。





◯ 蚕品種開発・遺伝資源保存

新たな蚕品種開発に必要な育種素材として当所では 約200種類のカイコ遺伝資源を保有しています。これら のカイコの遺伝解析と巧みな交配・選抜技術の融合に より、これまでに「プラチナボーイ」、「おりひめ」、「玉小 石」、「緑繭2号」などのユニークな蚕品種を開発し、衣料 用途のみならず医療分野や化粧品分野などの多様な消 費ニーズへの対応も行っています。また、保有する遺伝 資源の中には、学術的にも貴重で珍しい系統もありま す。このような系統の保存法として、液体窒素による卵 巣・精子の長期凍結保存法を開発しました。





●技術指導・協力

います。

伝統的な養蚕技術を維持継承できる数少ない研究

所として、養蚕農家への技術指導や新規養蚕就農者の

研修なども積極的に行っています。一方、近年では遺伝

子組換えカイコの飼育に必要な環境が整備され、次世

代型の養蚕への要望に応じた技術改良にも取り組んで

また、家政系大学等との共同研究により、絹消費科学

の視点から絹素材の特性を解明し、その研究成果の一

部は研修等を通じて消費者に発信しています。

広大な自然環境と設備の中で育まれる新たな発想